❶「木のポールハンガー」 柏崎恵里

2025 年／高さ 100cm
木工家具

木に囲まれた空間や窓の外から木の葉の緑の光が溢れている様子が印象深かったので、和洋折衷の邸内に馴染むデザインを目指し、木の形を模したポールハンガーを製作しました。
永山邸は既に人の住まう場所ではありませんが、カフェ等いまだに人々に愛される場所として生きています。木という材質、家具という形態から、この建物の生命感を想起して貰えると幸いです。ぜひ帽子や上着を掛けてご使用下さい。

❷「煌めき」 佐々木鈴菜

2025 年／ F6
アクリル・キャンバス

ツムグをテーマに命が紡がれていく様を作品に描いています。メインの動物も身体が植物のようになっており、命が芽生えていく生命力と朽ちていく儚さの両方を表現できるような作品にしました。

❸「花瓶と花」 小川桃

2025 年／ F15
油彩・キャンバス

異なる 2 つの時間軸が存在する永山邸の独特な雰囲気と歴史的背景を利用し、自分の個人的な体験を、永山邸に訪れた人々と共有する事をコンセプトとしています。和洋折衷のイメージと、北海道の歴史を花瓶と花に反映させ、永山邸の内装と絵の色彩が相互に引き立て会い、訪れた人々の印象に残る作品にすることで、昔展示会を訪れた際に印象に強く残った花瓶と花の絵を見た時の自分の感動を再現し、それを追体験してもらいます。

❹「いのちを紡ぐ」 黒川結菜

2025 年／ 21×21cm
アナログ

テーマの絲ぐが意味するもののひとつに糸なので、糸を使った絵を描こうと思いこの作品を作りました。紡ぐとき来て最初に思いついたのが生命を紡ぐという事だったので、それぞれ違う生き物の親と子がいて、生命が紡がれているという絵をつくりました。永山邸が作られたのが明治当たりということなので、色は鮮やかなものではなく少し古びた和風寄りの色で描いてみました。

❺「シンパシー」 サトウリン

2025 年／ F6×2 枚
油彩・キャンバス

シンパシーは「気が合う」「共鳴する」といった感情を指す言葉であり、相手と同じ気持ちになる、という意味になる。今回のテーマである「紡ぐ」から「糸」、「繋がり」を連想し、「心のつながり」をテーマに作品を制作した。心が繋がっていると感じる「喜び」と同時に、この繋がりがいつか絶たれることへの「不安」や縮んだ距離の側で大きくなっていく「恐れ」も表現した。

❻「ちかくてとおい」 歩樂

2025 年／サイズ可変／インスタレーション

糸でつながれた紙コップは、人と人との距離を感じさせる。声は届くけれど、姿は見えない。そのあいだにはちょっとした「もどかしさ」や「親密さ」もある。
かつて電話室は、誰かと通話するための静かな空間として設けられていた。周囲に声を聞かれないよう配慮されたこの場所は、今のように一人一台の携帯電話が当たり前でなかった時代の、人と人との距離感やマナーを映し出している。やがて携帯の普及によって姿を消したが、電話室という存在には、時代の流れとともに変化した「つながり」のかたちや、暮らしの価値観が静かに刻まれている。この空間は形としては残りながら「ちかいのにとおい」時代の距離を漂わせている。どこか懐かしく、どこかもどかしい。

❼「みち」 原寿寧

2025 年／ A4
アクリル

個人的にすごく思い入れのあるパフェなので、今回の作品のモチーフにしました。何気ないと思っていた時間が自分の人生の一部として紡がれることと、そういう瞬間はいつやってくるか分からないし、紡がれていることに気づくのはもっと後のことかもしれない面白さテーマにしたいと思いました。そのため、このパフェも何気ない瞬間を感じて貰えるように意識して描きました。

❽「藍染め・愛染め」 森田芽吹

2025 年／ F6・S4・P3・S0・200cm×87cm
藍染め（パネル・綿布）

「紡ぐ」という言葉を聞いた時、初めに思い浮かんだのは「糸」「思い」の 2 つでした。この 2 つの単語を結び付け、私が紡ぎたい思いを糸で表現しようと考えました。私が紡ぎたい思いは、藍染めを愛した祖母の思いです。藍染めもまた古くから紡がれてきた日本の伝統芸術の 1 つです。そのため祖母から紡いだ藍染めに対する思いを表現するとともに、藍染めの継承のために、この作品の制作に取り組みました。

❾「開墾の刻」 遠藤黄紗

2025 年／ 180×60cm
書・平面

昔、汗や泥にまみれ、蝦夷地を開墾した先人達がいた。私達は今、彼らが紡いだ歴史の上に生きているのだ。彼らがいた時代から今に繋がっているここ永山邸に、開墾時代をうたった作品を飾らせて頂きたいと思い制作した。泥臭い開墾魂の荒々しさが表現できていることを願う。
また、さっぽろ文庫から言葉を借りた小作品や、案内札なども手掛けたため、目を留めていただけると幸いである。

❿「化ケル」 石黒信乃

2025 年／ 50×100×100cm
インスタレーション・彫刻

明治の洋館に棲みつく狐の面は、この家を静かに見守り続ける守護であり、歴史を受け継ぎ、未来へとつなぐ灯でもある。
永山邸がこれからも愛され、守られ、語り継がれていくことを願って。
永山邸に漂う“気配”をかたちにしたこの作品を通じて、建物とともに生きる見えない存在を感じてもらえたら嬉しい。

⓫「桜の木」 阿部由歩

2025 年／畳 3 枚分程度
和紙と水彩と墨

「紡ぐ」というテーマについて考えた際、日本で昔から親しまれてきた「桜」が思い浮かびました。「桜」は日本の国花です。私たちの日常のとても近くにあり、いつの時代も美しく咲き続けています。
永山邸に桜を咲かせながら人々が紡いできた思いを一緒に表現していけるように作品作りをしようと思います。

⓬「ゆるやか」 加藤瑠華

2025 年／ 12×12cm2 点
平面・布

普段から糸を使った作品を制作しているので、そのつながりから今回も糸を使用して制作しました。絲ぐという言葉から感じた温かさと、永山邸の落ち着いた雰囲気のどちらとも調和できるような作品を制作することに挑戦しました。

⓭「宵と明けをつなぐ星」 佐藤蒼依

2025 年／ 50×30×30cm
本・インスタレーション

彗星や四季折々の星座など、いつどこにいても感じることの出来る星空の恵みは、たとえそれが遥か遠い昔だったとしても、また星の位置や形が変わってしまったとしても、輝きは褪せることなく私たちを照らし続けている。それぞれの物語と、それを紡ぐ糸の流れがなにを意味しているのか、自由に考察してみてください。

⓮「灯に結ぶ（高野切第三種より）」 佐々木来夢

2025 年 /35×35×70cm
立体・書作品

平安の世に歌い書かれた和歌を、今の時代に再び紡ぐ。人と自然、そして時間の移ろいを映す秋の歌を行灯に込め、やわらかな灯火として永山邸を訪れる人々を包み込む。

⓯「手を取り合って」 池本想奈

2025 年 /120×120cm
アクリル絵の具・布

薩摩と北海道で行き来した人の想いや繋がりを、多くの人が集まり多くの想いが集ったホールにテーブルクロスとして表現する。初めて永山武四郎が北海道に来た時、彼は北海道に「招かれた人」であったこと。そして、開拓使として北海道に在住し、次は彼が「招く人」としてだれかを永山武四郎邸に呼び込んだことを、2 人の人物が手を取り合っている様子を作品に写した。

⓰「函館の猫」 もりわき

2025 年／ A3×3 枚
平面

建物の雰囲気が自分の地元である函館市の西部地区によく似ており函館の街並みを思い出す事が多々あった。函館の西部地区には永山邸のような歴史ある建物と猫がたくさんいて自分の中ではセットのようになっていた。なので永山邸にも自分が描いた猫を置くことによって函館の街並みのようにし、自分の中の思い出を紡いだ。

⓱「生き続ける化石」 長尾きらり

2025 年 /F8
アクリル絵具・油絵具

" 時 " が刻まれる中で愛、言葉、歴史、人との繋がり、など様々なものが紡がれていく。
時代を経る毎に変化する街並みの中を " 生きた化石 " という異名を持つラブカが泳ぐ姿を作品にした。
時が紡がれる中で変わっていくものと変わらずに引き継がれていくもの。2 つの共存によって美しく楽しい世界が構成されており、この世界の構造がこの先も続いていくことを表現した。

⓲「雫」 小川あいり

2025 年 /40×50cm
キャンバスに油彩

明治から令和へと続く永山邸の歴史と、人と人との「縁」が水の流れのように静かに、かつ確かに紡がれてきたことに着目し、小さなキャンバスに「記憶のしずく」として描きました。
中心には永山邸を象徴するモチーフを取り入れ、周囲には抽象と具象が混ざる作品を配置することで、永山邸が多様な記憶や感情が交差する空間を表現しています。
また、作品同士を細い糸で緩やかに繋ぐことで、全体を通して「絲ぐ」というコンセプトを感じ取っていただけるようにしました。

⓳「日々」 片岡珠里

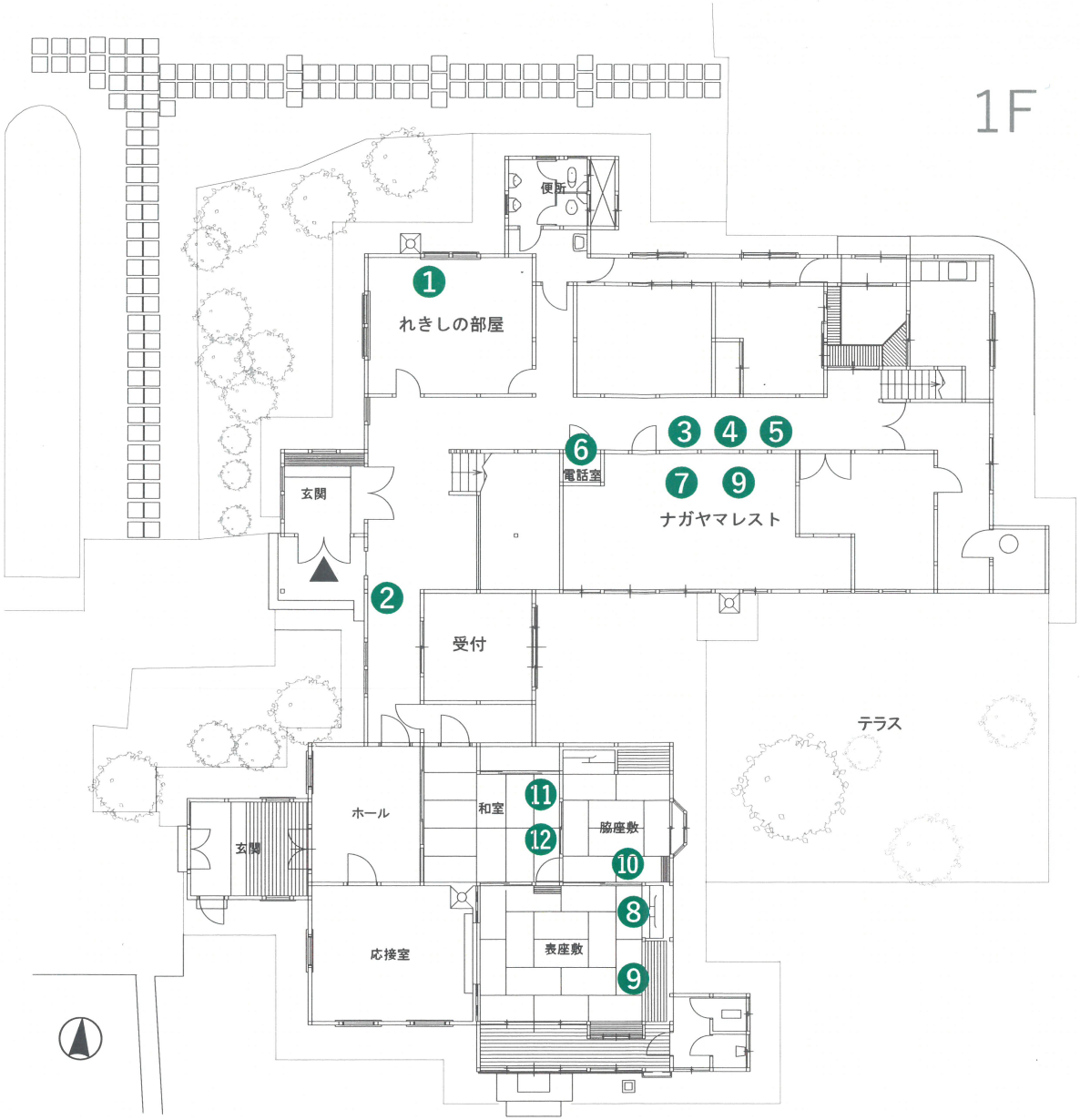
2025 年 /F1
アクリル・ポスカ・クレヨン・色鉛筆

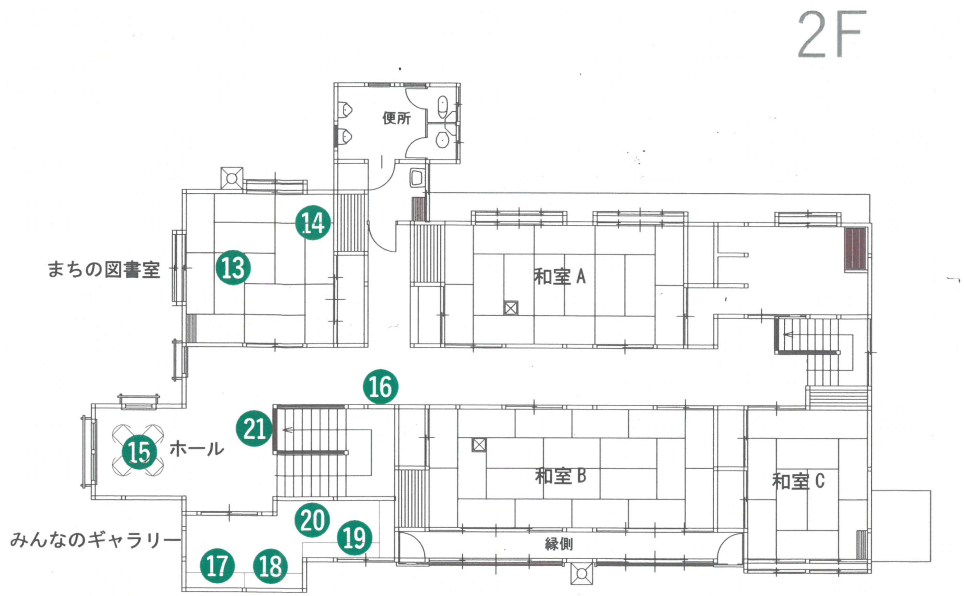
私たちは日々の小さな喜びや悲しみ、感動の積み重ねによって形作られています。永山邸もまた、日常や歴史の積み重ねが現在の姿を作り上げてきました。今回の展示では、その思いを込めて私が日常的に描いてきたスケッチブックをそのまま飾ります。

⓴「断片」 齋藤琳楽

2025 年／ 15×15cm8 枚
写真・イラストレーション

記憶とは曖昧なものである。人はそれを永遠に保ち続けることは出来ない。
しかし、紡がれた思い出や言葉は決して消えることなく、どこかに存在し続ける。写真はその瞬間を記録し、確かにそこにあった思い出を呼び覚ます。この作品が、あなたの中に残る記憶を思い起こすための紡錘となれば幸いである。





北海道教育大学岩見沢校美術文化専攻２年生有志

1. 「木のポールハンガー」 柏崎恵里
2. 「煌めき」 佐々木鈴菜
3. 「花瓶と花」 小川桃
4. 「いのちを紡ぐ」 黒川結菜
5. 「シンパシー」 サトウリン
6. 「ちかくてとおい」 歩樂
7. 「みち」 原寿寧
8. 「藍染め・愛染め」 森田芽吹
9. 「開墾の刻」他 遠藤黄紗
10. 「化ケル」 石黒信乃
11. 「桜の木」 阿部由歩
12. 「ゆるやか」 加藤瑠華
13. 「宵と明けをつなぐ星」 佐藤蒼依
14. 「灯に結ぶ（高野切第三種より）」 佐々木来夢
15. 「手を取り合って」 池本想奈
16. 「函館の猫」 もりわき
17. 「生き続ける化石」 長尾きらり
18. 「雫」 小川あいり
19. 「日々」 片岡珠里
20. 「断片」 齋藤琳楽
21. 「ジャイアントフラワー」 吉田爽良
（参加型ワークショップ作品）

Nagayamatei Art Project -tsumugu-

絲ぐ 展

2025.9.27 Sat. ー 10.13 Mon.
9:00 ～ 22:00（last day ～ 15:00）

明治、大正、昭和、平成、そして令和の今。この地に息継ぐ歴史は、水の流れのように一刻も絶えることなく紡がれてきました。

和と洋、明治と昭和、異なる様式と時代が交錯するこの旧永山武四郎邸及び三菱鉱業寮。ここで人々は出会い、別れ、現在に至るまで円の意図を紡いできたのです。

本展では、和と洋、過去と現在、そして人と人との交わりが生み出す豊かな繋がりがテーマの作品を展示します。今、ここにある風景のなかに、確かに息づく「縁」に想いを巡らせてみてください。